外来で使用される
こどもの薬の知識と与薬の工夫

# こどものがんばりをエンパワーする 薬剤管理と看護の取り組み

## 特集にあたって

発熱や鼻水，咳といった症状は，こどもの日常によくあるもので，症状を和らげるために用いられる治療の第一選択には，解熱薬などの薬剤が用いられることがほとんどです。多くのこどもたちが最初に出会う医療行為の一つが「服薬」であり，薬剤は医療現場において切り離すことができません。

薬剤は病気の治療や症状の緩和，予防に用いられますが，その効果を最大限に引き出し，副作用やリスクを最小限にするためには，適切なリスク管理が不可欠となります。

小児医療における特徴として，こどもは体重・体表面積が小さいため，薬剤の使用には体重や体表面積に基づいた投与計画が必要となります。また，臓器（肝臓や腎臓，消化管）の機能が未熟なため，代謝機能や排泄能力が低く，薬剤の吸収に影響が及びやすいという特徴もあります。加えて，こどもは成長・発達の途中にあることから，味覚や嚥下機能の発達状況や，その子の発達段階によって内服の方法に工夫が必要となります。病気や治療に対する理解も発達段階によって相違があり，こどもによっては心理的要因が複合的に服薬へ影響を与えることもあります。

外来における看護師の薬剤管理の目的は以下の５点があげられ，安全で効果的な薬物療法を支持していく必要があります。

①処方された薬剤を正しく理解し，適切に服用できるよう支援すること
②処方された薬剤の副作用や相互作用の予防や早期発見ができること
③アドヒアランスの評価を行うこと
④処方された薬剤の服薬指導や確認を行うこと
⑤安全で継続的な治療を支援すること

小児医療での薬剤管理ではこれらに加え，発達段階に合わせた服薬への説明や，その子に合わせた与薬方法などの工夫や怠薬がないかどうかといった十分な管理を行うことが求められます。また，長期にわたって薬剤治療を行うこどもには，継続的な服薬や皮下注射など，自身の状態を保持するために必要な投薬治療を自宅で行わなければならないことへの心理的支援も必要であり，こどもを養育する家族にも同様な支援が必要であると考えます。

薬剤は，治療による単なる効果だけでなく，そのこどもの生活の質（QOL）への影響も与えています。薬剤の副作用で吐き気や眠気が強い場合や，薬疹などでかゆみが生じた場合などは，日常生活や社会活動が制限されることがあります。薬剤の効果がもたらす影響について，わたしたちは薬剤治療を継続しているこども・家族に直接声をかけることで情報を共有したり，服薬にかかわる家族のたいへんさを理解したり，こどものがんばりをエンパワーしたりすることで継続した在宅での薬剤治療ができるのではないかと思います。

そこで本特集では，こどもの薬の基礎的な知識や，実際に行われている与薬の支援，服薬管理の概要，実際に服薬を経験した当事者の声などをとりあげました。

薬を正しく理解し，こどもの状態を全人的にとらえ，医師や薬剤師と共に情報を共有しながら，薬物療法を支えることが，チーム医療のなかでの調整役を担う看護師の役割として求められているのではないでしょうか。

**田村恵美** Tamura Megumi
埼玉県立小児医療センター移植外科・移植センター／
小児看護専門看護師